

TOHOKU EPO 「エポ」通信

vol.4



宮城県女川町(写真:小岩勉)

CONTENTS

地元学から連携協働の里地里山づくりへ

【報告①】奥会津人材育成ネットワーク集会2007
第9回・東北環境教育ミーティング

【報告②】第8回南東北「川・水環境」ワークショップ
東北地方環境事務所からのお知らせ

編集後記

EPO東北では、「環境パートナーシップとはどのように進めたらよいのでしょうか。」と題して、3月8日に新川達郎先生（同志社大学大学院教授）をお迎えしてワークショップを開催しました。多様な主体の様々な歴史文化に包含された組織同士の結びつきです。まず、連絡を取り合う、情報交換するなどから始め、お互いに議論の場ができたら、それがパートナーシップの第1段階です、とのこと。

「地元学から連携協働の里地里山づくりへ」をご執筆いただいた戸沢村角川の出川さんとは、一昨年と昨年続けて、気仙沼市唐桑で開かれた「森、里、川、海をつなぐ自然再生」のワークショップでお会いしました。また、こちらからも、角川でのワークショップに何度か参加させて頂きました。これはパートナーシップの第2段階くらいでしょうか。私は文中紹介されている地元の中学生の「…『元気のある田舎 角川』を全国に発信したいと思います。」を読んで、久方ぶりの感動を覚えます。

地元学から連携協働の里地里山づくりへ —戸沢村・角川里の自然環境学校の事例から—

出川真也(でがわ しんや)

特定非営利活動法人 里の自然文化共育研究所 専務理事

角川里の自然環境学校 研究員

山形大学高等教育研究企画センター戸沢分室 助教



山形県内陸北部・戸沢村角川地区に住み込んで5年目になりました。角川の住民による多様な里地里山活動は、外部者の受け入れ、行政・企業・大学など多様な主体との連携、他の里地里山地域との交流等様々な方面にその幅を拡大しています。

今回は地元の活動団体・角川里の自然環境学校を事例としながら、住民による学びと里地里山保全活動のこれまでを振りかえり、今後の地域に根ざし外部にも開かれた里地里山活動の可能性を展望してみたいと思います。

1. 戸沢村における「地域の学校づくり」と角川地区の「地元学」

戸沢村ではふるさとの「よさ」をもう一度見つめなおしてみようと「地域の学校づくり」というスローガンのもと、ふるさと学習の取り組みを盛んにやってきました。戸沢村内で最も山間地にある角川地区(人口約1千人)では地元の有志住民で南部里地探検隊という団体を作って源流に探検に行ったり、ギフチョウなどの希少種の探索会を子ども達とやっていました。私が戸沢村に入るきっかけもこういう取り組みを地域から勉強させていただきたいということだったので。しかし、実際に活動に参加していると、地元を中心となっている方々から悩みも耳にすることになりました。「こういう活動をやっても、イベント的で一過性の取り組みで終わってしまったり、一部の住民だけの参加になってしまったりしてなかなか広がっていないんだ」というのです。改めて活動を見直してみるとほど確かに地元でもここはすごいなという所やこれは際立っているなという所だけがクローズアップされていることに気がつきました。これでは限られた層の住民にしか関心を抱いてもらえない。でも実は地元住民が普段意識せず何気なく行っている

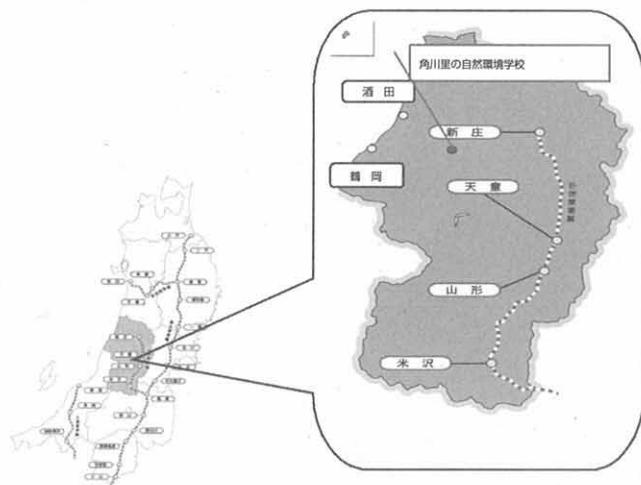


図1 戸沢村角川地区の位置関係 角川地区は山形県内陸部戸沢村の中山間地域に位置する。人口約1千、3百世帯。最上川の支流角川に開けた140の山村集落からなる。

暮らしの営みやありふれたもの(こと)にこそすばらしい価値が見出せたりもするわけです。

住み込みで勉強を始めると最初住民からは「出川君、なんでこんな何もない村に来たんだ?」と言われました。しかし私から見ると何もないどころかいろいろと興味深い暮らしの営み、自然環境の営みというのがあるように思えます。そこでそういった事を一つ一つできるだけ丹念に聞いていくという作業を続けてきました。そうする

と二ヶ月、三ヶ月としばらくたつと今度は逆に地元の方から「出川君、あそこにはこんなものがあるから見ていい方が良い」とか、「今こういう行事があるから参加してみたら?」という事が増えてきました。ついにとても私一人では調べきれなくなってしまったのです。

そこで「角川地区の中心集落で地元の方々、子ども達とみんなの力で一緒に調べましょう」という話になりました。これを「地元学」と私達はよんでいるのですが、地域

地元学の流れ

1. 基本的にすること

地域の人とよそモンが一緒に集落を歩いて、「あるもの探し」をする。

2. 地元学調査(調査方法はいたって簡単)

ステップ1: じいちゃん、ばあちゃん、その他集落の人、よそものが集まる。

ステップ2: 集落や集落の周辺地域をいっしょにまわり、よそものが面白そうだと思うことやものを集落の人に質問し、それを写真に撮り、集落の方の説明を資源カードに記入していく。

ステップ3: 調査からかえってきたら、その結果をカードをもとに発表。
(地域内コミュニケーションの活性化と情報の共有化)

ステップ4: 調査からかえってきたら、その資源カードをもとに地図に書き込んでいく。また資源カードを整理し一覧表を作ります。

↓
地域環境マップと生活文化大百科の出来上がり。





集落を地元の方々と、私のような地域をよく知らないヨソモンが一緒になって、山に行ったり、石碑を見たり、家々を見て回ったりする。そして地元住民に質問をしながら教えてもらうという。ただそれだけのことです。でも、農山村、里地里山地域の自然とか文化というのはなかなか見ただけでは分からぬ。聞いただけではもちろん分からぬ。あまりに違いすぎて分からぬわけです。その地域独自のもの、その地域でしか通用しないものが数多くあるので内部に入って実際にやってみて、はじめてようやく分かるということがよくあります。だから調べ方のコツとしては、聞いて、見て、実際にやってみて、というように調べました。このことはこの調査手法が特定の研究者だけではなく、いろんな人々が一緒に調べることができるということを意味します。最後はみんなで集まって調べた情報を地図に書き込んだり、カード化したりして発表会をすることで情報を共有しました。

2. 角川里の自然環境学校の設立と活動の展開

〈設立のきっかけ〉

地元学の結果よりリアルに地域集落が自然と文化が豊かだということを再発見することになりました。それは私のようなヨソモンが再発見したというのではなく(私は最初からこの地域がすごいということには気が付いていた)、地元の住民自身が、外部者の目線の違いを利用して自ら持っている知恵や技術、その価値を再発見したことです。同時に課題の部分も見えてきました。この集落では一日の調査で500くらいのものが再発見されましたが、その2割ほどは10年後と言わばこのままではその価値や存在すらも気が付かないまま1~2年で消えてしまいそうだということが明らかになりました。あの婆さんがいなくなるとこの郷土料理の製法は分から

なくなるとか、あの爺さんがいなくなると、あのマタギのおじさんがいなくなると、あの里山はどうやって管理していたのか分からなくなるとか、こういったことが実感を伴ってきたのです。「このままでは本当に何もない集落になっちゃうぞ」「何かせねば」という話が調査をした住民たちの間から出てきて、「では、地域の自然や文化を次の世代に教え伝えていく取り組みをしていこう、その中で地域づくりを考えていこう」、そして「それは誰が教えることが出来るのか。やはり地元の住民しかいないだろう」ということになりました。こうして角川地区の住民が「里の先生」として、活動の中心となって運営する取り組みができあがりました。「角川里の自然環境学校」です。

〈活動の内容〉

角川里の自然環境学校では、取り立てて目立つようなお祭りやイベントは行いません。まずは、角川の日常の自然や生活文化を外部の住民と共有しつつ学びあうことが大切だという思いがあるからです。普段の里の暮らしの営みをきちんと見つめながら里づくりを進めようとしています。したがって、四季折々の里の自然や暮らしのものが学習活動のメニューとなっており、地域住民が日常の暮らしの延長線上で以下の6つの学校を運営しています。(図3)

山の学校…地元のまたぎのおじさんたちが中心となって運営しています。里山の保全や生き物の生態、山菜やキノコ採りの知恵や技術を伝承しています。

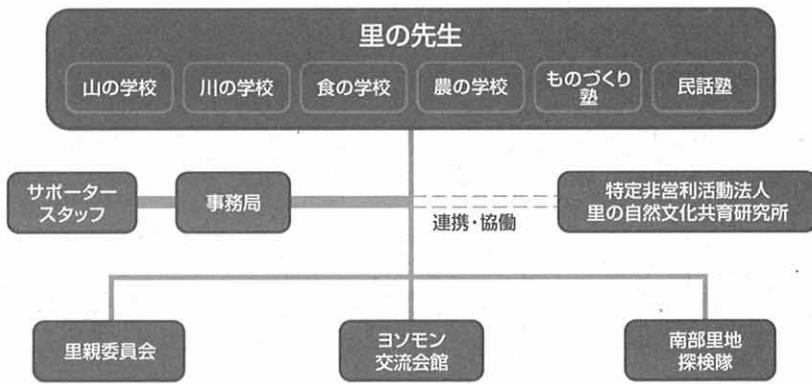


図3 角川里の自然環境学校組織図

川の学校…子どもたちにもっとも人気のある学校。地元の漁師さんたちが先生役となって、伝統漁法を中心に魚捕りの技術を教えます。また、川遊びや水辺の生き物観察会などを行っています。

食の教室…里山や川、農地から取れる新鮮な素材を使って、角川の里ならではの郷土料理の教室を開いています。ここでは地元のおばさんたちが先生役。加工場も開設され角川の食文化を外部にも発信しています。

農の学校…田んぼビオトープや無農薬の米作りに取り組む「田んぼの学校」、無農薬の野菜作りに取り組む「畑の学校」があります。中山間地域で農業を営む農家の皆さんのが先生役で「角川カブ」などの伝承野菜の保全と伝承にも取り組んでいます。

ものづくり塾…主に地元の高齢者が中心となって里山のつるなどの素材や田んぼのわらなどの素材を利用した山村の工芸品の伝統技術を伝承しています。

民話塾…雪深い角川の里には多くの民話が伝わっています。笑い話、悲しい話、村で暮らすこと心得など、地域生活に密着した民話が数多くあります。独特的方言で語られる角川の民話塾は地域の心を伝える場ともなっています。

里親委員会

角川の体験活動には、外部からの参加者は1泊2日以上の行程で訪れることがあります。そこで、こうした外部の参加者にホームステイしてもらおうと始まったのが、角川の山村ホームステイ制度です。受け入れにあたってお客様扱いではなく共に村のことを学び、里づくりにかかわる仲間として受け入れたい、だから親戚の延長線上で受け入れようという話になりました。そこで集落住民の有志で「里親委員会」を結成。現在60軒ほどが里親登録をしており、地域生活に密着したより内容の濃いプログラムが行われています。

4. 角川の里地里山活動から 見えてきたもの ～子どもたちの声から～

このような活動を続けていると子ども達から将来この里で暮らして地域のよさを発信していきたいという声が出てきました。ある日、地元小中学校の先生からよばれ、「生徒に作文を書かせると最近は地域のことを書く子が増えているようだ」と言って次のような作文を見せていただきました。

地元の中学生の作文より

「『角川?どこにあるんですか』…こう聞かれて恥ずかしいと思ったことがあります。なぜなら、僕にとって、角川は何もないただの田舎だったからです。僕が暮らす角川は、ヤマメやイワナがたくさん泳ぐ美しい川に沿って小さな部落が点在する地区です。都会の人は、『自然がきれいでいいね』『ゆったりできでいいね』などと言いますが、僕は心の中で、それは違うと思っていました。田や畠仕事の大変さや、町から遠いことによる不便さ、そして高齢化や過疎化など深刻な問題もたくさん抱えているからです。…(中略)…角川の地元学は、便利さなど表面的なものに憧れ、自分の身近なものとの本当の価値に気づかなかった僕が、足元を見直す貴重な体験となった…(中略)…若者がいない、活気がない、大型スーパーがなくて不便だというマイナス面だけがクローズアップされてきました。『昔はこんなんじゃなかった』とは言っても、どのようにすれば若者が引き留められ活気を取り戻せるのか、真剣になって解決策を考え実行しようとする人は誰一人いませんでした。

今は大人が立ち上がり、解決策を考え、大切な文化を子ども達に伝えようとしています。…(中略)…真剣になっている大人の心を、僕たち子どもがしっかり受け止めなければならないと思います。そういう気づきをこれからも大切にしながら、「元気のある田舎角川」を全国に発信したいと思います。」

5. 最新の状況

～連携協働、新たな仲間作りに向けて～

角川の活動は、地区を越えて広がりを見せようとしています。上流に位置する角川地区は近年特に中下流域の農村や海辺の集落との交流活動を積極的に行っていきます。食文化交流や子どもたちのふるさと学習の交流など、密接な関係があるけれどもこれまで十分つながりをもってこなかった地域との連携ができつつあります。また、行政をはじめとして企業、学校、大学、他のNPO団体等と連携した新たな里づくりとその多様な展開を模索し始めています。2007年11月には、こうした多主体・広域連携の動きを活性化させるべく角川里の自然環境学校から「NPO法人里の自然文化共育研究所」が立ち上りました。新たな仲間作りと人づくりが里の自然や文化の新しい再生につながる、そんな思いを持ちながらこれからも私たちの活動は続いていることを。

【連絡先】〒999-6403

山形県最上郡戸沢村大字角川481-1

戸沢村農村環境改善センター内

TEL/FAX 0233-73-8051

E-mail sato-school@orion.ocn.ne.jp



図4 山・里から川・海そして都市住民との協働へ

奥会津人材育成ネットワーク集会2007 第9回・東北環境教育ミーティング

- 日 程：2007年11月23日（金・祝）～25日（日）
- 会 場：福島県三島町を中心に奥会津町村の各フィールド
- 宿 泊：「森の校舎かたくり」（旧三島町立西方小学校）
- 主 催：只見川電源流域振興協議会・奥会津人材育成ネットワーク集会実行委員会

『歳時記の郷・奥会津』からの招待～自然・文化・精神の伝統と新しい学びの場づくり～と題して、農山村地域において過疎化・高齢化が進んでいる現在、福島県奥会津の流域社会に新たな風をもたらすことを目的として、「奥会津人材育成ネットワーク集会2007～第9回・東北環境教育ミーティング～」が開催されました。

プログラムは、福島県三島町を会場として2泊3日で行なわれました。只見川流域7町村の地域資源を外部の体験プログラム専門家の協力を得て再発見し、あわせて各町村のリーダー的人材や体験プログラムの交流をはかるというものです。東北内外から90名ほどの人が集いました。



開催日程

11月23日（金・祝）

- 13:00 開場 受付開始（場所：交流センター「山びこ」）
- 14:00 歓迎のあいさつ
- 14:15 オープニング鼎談セッション
「創造的な地域のための戦略モデルを考える」
ゲスト：敷田麻実 氏
(北海道大学大学院教授・生態資源管理学)
高木晴光 氏（北海道・NPO法人ねおす代表）
コーディネーター：佐々木豊志 氏（くりこま高原自然学校）
- 16:30 基調講演「只見川の自然是世界遺産級」
ゲスト：新国勇 氏（只見町・只見の自然に学ぶ会会長）
コーディネーター：嵯峨創平 氏（三島町エコミュージアム）
- 17:30 オリエンテーション／交流会

11月24日（土）

- 9:00～16:00 奥会津体験プログラム（5コース）
 - 1) 伝え方!!の大切さを実感する「まさかのときの生き残り塾」
 - 2) 奥会津の技に触れる～工人との交流からそのルーツを探る～
 - 3) 奥会津の小さき神々の道を訪ねて～エコミュージアムについて考えよう～
 - 4) 森のようちえん～子育ての環境・地域資源の活用を考えよう～
 - 5) 世界遺産級のブナの森を歩く～奥会津の自然の特性を知るエコツアー～
- 19:00 ナイト・セッション
- 21:00 交流会

11月25日（日）

- 9:00 全体会 2日目の分科会報告
- 10:00 分科会ワークショップ
- 12:00 昼食
- 13:00 まとめの全体セッション
- 14:30 終了

1日目は全体での鼎談セッションや基調講演が行なわれ、地域との専門家のかかわりや利害のない外の人（よそ者）の潤滑材としての役割など、示唆に富んだお話がありました。また、2日目は分科会での活動となり、5つの体験コースに分かれました。

参加した第3分科会、「奥会津の小さき神々の道を訪ねて～エコミュージアムについて考えよう～」では、三島町早戸地区に散在する小さな神々を巡る道を訪ねました。東北の古い神々と人々の暮らしとの関わりについて学ぶというものです。

この日は、地元の佐久間定雄さんに、早戸地区という石像や祠の多い地区を案内していただきました。小山の上や岩の陰など、教えてもらわなければとても気がつかない場所に小さな祠や石像がたくさん点在しています。（写真）水神や金毘羅が多いそうで、その数は30以上あり、様々な神様の形があることを知ることができました。またそれぞれの神様にはお参りを担当している家があるとのことで、信仰が生活に密着して残っている地域です。

外を案内していただいた後は室内に入り、全員でワークショップを行ないました。それぞれが発見・理解したことを発表し、そしてそれをこの地域にどう生かしていくのが良いのかという提案を出し合いました。地区は高齢化しており、お参りももうやらなくなってしまったところもあるのだそうです。せっかく長い間受け継がれてきたものがなくなるのはとても寂しい感じがします。ここでは、外の人に地域のいろいろな宝を知ってもらうのに、祠などを探すウォークライ一のようなゲーム感覚の体験活動の案などが出来ました。まとめでは、都市と農村の交流や、よそ者の力を上手く利用していくことなどの話が出ました。

3日目の室内ワークショップでは、山形県朝日町エコミュージアム協会のゲスト安藤竜二さんに、朝日町エコミュージアムについて詳しい紹介をしていただきました。地元の方からの聞き取り調査が重要であること、地元の方に先生になってもらうこと、また自分達だけでやらないなど、実際に活動された経験に基づいていろいろなヒントをお話くださいました。

3日間を通して参加して、たくさんのことを見聞きして学ぶことが出来ました。次回の環境教育ミーティングは9月に秋田で開催とのことです。（担当：谷田貝）

第8回 南東北「川・水環境」ワークショップ

東北「川・水環境」ワークショップは、水環境の保全に関わる立場の異なる人々(NPO・教育機関・企業・行政)が、それぞれの取り組みの成果を発表し合い、互いに意見を交わすことで、より良い水環境の保全につながるヒントを探ることを目的としています。毎年、北東北(青森・秋田・岩手)と南東北(山形・宮城・福島)の2カ所で開催されており、今回が第8回目です。南東北大会は2007年11月17・18日に山形県朝日町で、北東北大会は2008年1月26日・27日に青森県青森市で行なわれました。

ここでは、11月に行なわれた南東北「川・水環境」ワークショップで発表した14団体の15活動について紹介します。

プログラム
2007年11月17日(土)/1日目
13:30 開会式
14:00 分科会
16:30 分科会報告会
18:30 交流懇親会(Asahi自然観)
2007年11月18日(日)/2日目
9:00 復活選考
9:30 全体会
11:30 全体講評・表彰式
12:00 閉会



分科会(1日目)

5~6団体の発表をひとつの分科会として、各分科会からアドバイザーを中心参加者全員の総意で全体会へ推薦する1団体を選出します。

復活選考(2日目)

1日目の分科会で推薦されなかった団体の中から、参加者全員の投票にて数団体を推薦します。

全体会(2日目)

分科会と復活選考から推薦された団体の中から、アドバイザーを中心参加者全員の総意でグランプリと準グランプリを選出します。

グランプリ

NPO法人 朝日町エコミュージアム協会 「水とくらしの探検隊」

“水とくらし”をテーマに地域の成り立ちや先人の偉業を学び、地域の宝物を再発見しながら郷土愛を育てていこうという取り組みです。小学校4年生の親子を対象にしています。実施後、その成果として小冊子、DVDを作成し、こうしてできた学習プログラムは学校や地域での郷土学習の一環として取り入れられ活用されています。

グランプリ

米沢中央高等学校科学部 「最上川の環境保全活動」

主な活動として最上川本流と支流の水質の科学的な調査、最上川のゴミ清掃、河川観察会、舟運水路の測量を行っています。最上川の水質調査は毎年7月末に実施し、今年で15回目となりました。この成果をまとめ2005年には「母なる川・最上川の水質」、2006年には「最上川の水質2006」を出版しています。

準グランプリ

ドキドキ探検隊「野外活動」

朝日町の地域のすばらしさを発見してもらい、愛着心を育むとともに、多くの野外活動体験からたくましい心豊かな子供を育てることを目的としています。子供たちを対象にし、地域の自然、歴史や文化を活用した活動を提供しています。

朝日町賞

新発田川を愛する会「新発田川再生活動」

城下町新発田市の中心街を流れる新発田川は、BODが20、魚のすめない汚れた川でした。しかし江戸時代には運河として利用され、また生活用水の重要な供給源がありました。このような歴史のある川を再生するために、川の沿線に市の花であるアヤメの植栽をしたり、憩いの場となるような河川公園の提案、水質調査の実施といった取り組みをしています。

- 日程：2007年11月17日(土)・18日(日)
- 場所：山形県朝日町
エコミュージアムコアセンター創遊館
- 主催：東北「川・水環境」ワークショップ実行委員会



2日目の復活選考では、ワークショップの参加者全員が各発表団体のパネルに1人1枚投票を行い、全体会での発表団体を選びます。

朝日町賞 仙台市青葉区中央市民センターと宮城教育大学 「ひろせ川図鑑」

広瀬川を活動フィールドにした親子対象の事業です。今年度は年8回(夏3回、秋3回、ボランティア対象2回)の講座が開かれました。事業のねらいは、自然体験活動の推進、環境教育の推進、広瀬川の自然を考える機会の提供です。3年前から宮城教育大学の学生がボランティアとして一緒に活動を行っています。

朝日町賞 仙台リバーズネット梅田川「水の探索人」

学校や地域コミュニティーの現場で活動しています。直接見たり触れたりすることのできない“間接水”的存在を知り、そこから世界の水事情や水の大切さ、水と不可分の食、食事情と地球温暖化等の関連課題の学習を目的としています。

東北地方整備局 河川部河川環境課賞 古川を美しくする会「水質調査」

福島県伊達市保原町を流れる古川は、周辺の都市化、工業化による廃水の流入やゴミの投棄により死の川と化しました。美しい古川を取り戻すために、ゴミ拾い、川岸の草刈、水質調査、学校での環境学習支援などの活動を行っています。特に水質調査では、銅版を用いることで川の汚染度合いが視覚的にわかるという、画期的な方法が用いられています。

●その他の発表団体

実行委員長賞には、国土交通省東北地方整備局最上川ダム総合管理事務所白川ダム管理支所「白川ダム流木処理のあの手・この手」、東北地方整備局酒田河川国道事務所工務第一課「赤川自然再生事業～外来種ハリエンジュ駆除の試み～」が選ばされました。

また、同じ朝日町エコミュージアム協会の活動の中で、五百川峡谷についての講座を行なってきた「おらほの最上川学」や、元気な子どもみんなでふれあう窪田水辺の学校推進協議会による子ども達が白鳥や自然と触れ合う「窪田水辺の楽校事業活動」、白鷹観光開発(株)による「最上川とヤナ」をテーマにした体験や事業の紹介、ユビキタスな「癒し」の川づくり委員会による地域に相応しい川の将来像を創っていくことを目的とした活動もありました。また、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による「ゴミを『拾う』から、ゴミを『捨てない』へ」という活動もありました。この活動では河川のゴミを「拾う」だけではなく、「捨てさせない」取り組みの

必要性を、イベントで県民の方々に見てもらったということでした。

今回、私達もワークショップに参加し、宮城県仙台市における「広瀬川1万人プロジェクト」の活動報告をしました。この活動は、100万都市仙台市の1%である1万人をキーワードとし、広瀬川一斉清掃を実施することで広瀬川の魅力を見出し、川に親しみ、また日頃の暮らしを見直すきっかけとしているのです。そして、ワークショップの最後には、全ての団体にオリジナル賞が授与されました。

●第8回 南東北「川・水環境」ワークショップに 参加して

今回、このワークショップに参加する機会を与えられ、様々な活動があるということを知ると同時に、何よりも参加者の皆さんのが川・水環境に対して、大切にしたい・より良くしたいという想いを持って取り組まれていることを強く感じました。

どの発表も大変興味深く、高校生が主体になって活動していたり、ご夫婦で活動していたり…発表された活動の多くは地域に根付いたもので、自分の住む地域の川をきれいにするために、地域の文化を守るために、子どもたちに伝えていくために行なわれているものでした。活動に誇りを持ち、心から楽しんでいるということがわかりました。また、発表を聴く方々の目もきらきらと輝いていました。活動の数だけ人々の想いがあるということを感じました。

発表する場を通して、聴く側にとっては、様々な活動やその想いを知るだけではなく、そこから自身の日頃の生活を振り返る機会となったり、これから活動や何かを考えるきっかけ・気づきとなつたかもしれません。また発表する側は自分の言葉で伝え、そして意見や感想をもらうことで、これからの活動に対する士気を高めるだけではなく、活動をより良く繋げていくための参考になったことと思います。

地域や川の名前が違っていても、それを大切にする気持ちには変わりありません。本ワークショップを通して想いを共有し、意見を交換することで、大切な資源である水について考えることができました。この様な活動を多くの人に伝えることで、さらに川・水環境が一人ひとりにとって身近に感じられるものとなっていければと思いました。

会場となった山形県朝日町はとても緑豊かな街でした。全てが関わりあって今の環境が成立しています。私達もそれに関わる一員として、もっと幅広く環境に目を向け、行動を起こしていくらと思いました。
(担当:久津間、蒲生)

東北地方環境事務所

NEWS

平成20年度エネルギー対策特別会計における補助・委託・交付金事業について（環境対策課）

環境省では、地球温暖化の防止に効果的な対策として、化石燃料に代わる新エネルギーの利用促進、省エネシステム・機器の導入、それらを効率的に組み合わせた事業、温暖化対策の新技術・新システム開発やビジネス支援などのエネルギー起源二酸化炭素の排出量削減に確実につながる事業を展開する団体に対して支援を行っています。

○平成20年度エネルギー対策特別会計における補助・委託・交付金事業（パンフレット）

http://www.env.go.jp/earth/ondanka/biz_local/20pamph/index.html

○助成の対象となる各事業とその概要、対象者、申請窓口、スケジュール、その他申請に必要な情報

http://www.env.go.jp/earth/ondanka/biz_local.html

お問い合わせ 環境省東北地方環境事務所環境対策課 TEL.022-722-2873

平成20年度全国ごみ不法投棄監視ウィークについて（廃棄物・リサイクル対策課）

環境省では、毎年5月30日（ごみゼロの日）から6月5日（環境の日）までの1週間を「全国ごみ不法投棄監視ウィーク」と定め、全国各地において、自治体や民間団体等との協力・連携により、清掃美化活動、不法投棄監視パトロール等の活動を展開しています。

平成20年度の不法投棄監視ウィークには、5月30日に東京で開催が予定される「不法投棄撲滅シンポジウム」を皮切りに、全国各地で不法投棄監視パトロール等の監視活動が実施されます。さらに、より広く不法投棄監視ウィークを周知するため、「不法投棄撲滅運動シンボルマーク」を公募するとともに、シンボルマークをデザインした看板、ポスター等を作成し、全国で広報に努めることとしています。

東北ブロックでも、東北地区6県の各地域で、各種団体等の協力・連携により、「不法投棄スカイパトロール」、「漂着ごみ調査」及び「クリーンアップ清掃活動」等、不法投棄撲滅を目指して多彩な活動が行われる予定です。

お問い合わせ 環境省東北地方環境事務所廃棄物・リサイクル対策課 TEL.022-722-2871

東北圏の地域活性化の推進に向けた支援策について

地域活性化の関する政府の施策を推進するため、「地域活性化統合本部会合」のもと「地域活性化統合事務局」が新たに設置され、本年2月末には、東北圏の地域活性化を推進するため、地域発のアイデアや取組を政府が一体となって支援する「東北圏地方連絡室」が発足し、東北地方環境事務所からも同連絡室に参加しています。また、平成20年度からは、地域主体の様々な取組を支援する「地方の元気再生事業」や「環境モデル都市」等の制度が創設されます。これらの事業の概要や募集方法については、東北地方環境事務所やEPO東北ホームページ等でもお知らせしていく予定です。

お問い合わせ 環境省東北地方環境事務所総務課 TEL.022-722-2870

または廃棄物・リサイクル対策課 TEL.022-722-2871

つなぐ

3年前までは奇異に感じていた春先のマスク人だが、この鳥トンビ族マスク人の市民認知度は充分のようだ。マスク談議が通過儀礼の如く、近頃の打ち合わせや会議の始まる前に、ひとしきり花が咲く。服用している薬が同種だったりしたらまたまた盛り上がる。花粉症に縁がない私は、肩身の狭い思いがする春先のこの頃だ。

私は帽子とマスクが元来苦手で、目深の帽子とサングラスで顔全面を覆い外出する鳥トンビ族マスク人を尊敬している。天から押さえつけられるような状態は息苦しく、私には5分と保てないだろう。社会の不条理に怒らない人びとが多くなったのは、日常的に我慢を強いられているからだろうか？（ま）



[発行]



EPO TOHOKU
東北環境パートナーシップオフィス
Environmental Partnership Office Tohoku

〒980-0014

宮城県仙台市青葉区本町二丁目5-1 オークビル5F
TEL.022-290-7179 FAX.022-290-7181
E-mail:info@epo-tohoku.jp URL:<http://www.epo-tohoku.jp>
業務時間：月～金曜日 10:00～18:00
休日：土・日曜日及び祝日、年末年始